
悪になりたがりの再生者

Soul Pride

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪になりたがりの再生者

【Nコード】

N3259BA

【作者名】

Soul Pride

【あらすじ】

連続殺人鬼によって家族を失った少年、加添十四の突然の失踪。そこから物語は始まった。

魔法という物に関わり、劇的に生活は変わった。寂しさは埋められ、空白は、欠落はなにもなかった。楽しかった。嬉しかった。心地よいものであった。

しかし一方で十四は、心の中にある空白がないことに絶望した。求める物がない。それは、生きる活力がないと同じではないのかと。我慢ならなかった。疼いた。渴いた。飢えた。欲望が欲しいと、十

四は新しく手にした日常から決別するため、姿を消した……！
失踪した十四を追うべく、魔法少女たちは空を飛ぶ。

ISとは違って短い話を連続的に出してみるテスト的なものです。よって更新頻度はこっちの方が多くなると思いますが、内容に関しては短いと思います。よろしく、おねがいします。

起源は慟哭、失踪

高町なのは、十歳。私立聖祥大学付属小学校五年生の彼女は走っていた。

息を切らし、学校帰りのままであることを制服と背負った鞆が示している。

走るのは得意ではない。運動神経は、なのはあまり高い方ではない。むしろ苦手な分野である。

荒い呼吸を繰り返し、全速力で疾走する。ペース配分なんて最初から考えていない。勢いを落とさず、速度を落とさず、さらに加速をしようとしている。

呼吸が辛い。脇腹に鈍い痛みが走りっぱなしで、足を動かすのが苦痛だ。

それでもなのは足を止めない。走り続けて走り続けて、足が壊れるまで加速を止めない。

躓いて転げる寸前になっても、コンクリートの地面に手をついてすぐさま体勢を整える。てのひらが擦りむけても、なのはまるで気にしない。

急ぐ。急ぐ。

いくら自分が辛かろうと関係ない。いくら自分が苦しかろうと問題ない。

痛みは我慢できる。苦しみは歯を食いしばれば誤魔化せる。

しかし彼女は我慢できない苦痛があった。

高町なのは、自分の苦痛よりなによりも、他者の苦痛がなによりも苦痛と感じ、我慢することができないのだ……。

「お母さん!」

「ぜー、ぜー、と肩と背中を揺らし、息を絶やししながらなのは駅前」
前に店を構える喫茶翠屋へと飛び込む。

高町家が経営するこの喫茶店は、彼女の父がオーナー、母がパティシエをしている。海鳴市でも有名所の一つに入る名店であり、なのは自身もそんな両親を尊敬している。

「どうしたの、なのは。そんなに慌てて……」
「……が、いない、の……」

厨房から、なのはの母、高町桃子が呼ばれて出てくる。娘のいつもの違う様子に、驚いた様子だ。

全速力で走ってきて声が枯れてうまく出すことができない。後先考えずに走ってきたツケが回ってきた。

桃子は一旦厨房へと戻り、コップに水を一杯くんでそれをなのはに渡す。ひとまず落ち着かせなければ話を聞くことができない。

なのははそれを受け取って、一気に中身の水を飲み干す。

落ち着いたのか、呼吸も落ち着き、少しだけ冷静さを取り戻した。

「それで、どうしたの？落ち着いて話してみて」

「いなくなったの！あの子が、あの子が……！」

それでもなのはの顔は真っ青で。今にも目に溜めこんだ涙が零れ落ちそう。体の震えが止まらなくて。

自分のせいだ。自分のせいだ。自責の念が、延々と責め続け、彼女の不屈の心が折れかねないほどである。

心に背負ってしまった罪の意識は、彼女の小さい体を容赦なく押し潰そうとしていた。

「十四くんが、いなくなっちゃったのっ！」

とある少年の失踪、そして少女の慟哭から、物語の引き金は引かれた。

亡失、資質の覚醒

加添かぞえ十四は十一歳、小学五年生のどこにでもいる男子だった。

空手を習い、サッカー少年団に所属し、塾通いに追われる、ただの小学生であった。

……過去形となってしまうたのは、現在の時間軸から一ヶ月の時を遡った先に原因がある。

端的に言ってしまうえば、加添家は皆殺しにされた。加添家惨殺事件。メディアで大きく取り上げられ、連日お茶の間をにぎわせ、恐れさせた。

その唯一の生き残りが十四であった。殺人鬼から運よく生き延びた男の子。世間の同情の視線に彼はさらされた。

ここで話を終わらせてしまえば、平々凡々ありふれたとは言えないがただの事件の一つとして数えられていた。次第に人々の記憶から薄れていき、そして忘れ去っていく。その程度のことではない。

しかし、話はそれで終わらせていない。終わらせてはいけない。本当の要点は、ここからである。

加害者である犯人が、管理世界　魔法使いたちの世界からやってきた連続殺人鬼であった。その殺人鬼も、魔法使い　魔導師であつた。

その殺人鬼は管理外世界の住人を集中的に狙い、家族単位から村単位で皆殺しにする。警察組織であり司法組織である管理局から全次元世界へと指名手配された、特S級の札付きの犯罪者であった。

魔導師と魔法を使えない一般人との力の差は絶望的と言ってもいい。単騎のEーS級魔導師は一国の戦力と比肩することだつてある。

さらにその殺人鬼は魔法の腕も冴え、転移魔法の達人。ショートジャ短距離移動シラから次元跳躍まで使いこなし、管理局の手から逃れ続け、殺人をし続けてきた。

そして第97管理外世界、地球の日本の、加添家に殺人鬼は標的を定めた。

その日、日曜日であった。雨の日であった。仕事で忙しい父親も、家事に追われる母親も、部活動に熱心な兄も、偶然が重なったように休みが重なり、その日サッカー少年団の練習試合があった十四もあいにくの雨で注視となり、退屈にしていた。

どこか食べに行くか。

父からの提案。それを歓迎する母。そして、どこに行こうかと兄。

どこに行きたい？

父は息子たちに何を食べたいと聞いた。

どうする、何が良い？と兄は、十四に決定権を譲った。

十四はふと、赤身のマグロが食べたいと思った。

寿司。回転寿司がいい。

よしきた、と父は車のキーと財布を用意し、母は化粧をし、兄弟はいまかいまかと待った。

支度が終わり、外へ出ようと家族全員が玄関へと向ったその時。

惨劇は、起きた。

十四が自我を取り戻した時には全てが終わっていた。

体にはいくつもの裂傷。骨折。座り込んだまま動くこともできず、全身から走る激痛が激痛でなくなつて麻痺となり、吐き気を催すほどに苦痛であつた。

目がかすみ、気だるさに満ちている。どうしようもなく、体が重い。

いつもより、視界が狭い。左目は潰れていた。なにも、音が聞こえない。鼓膜は破れていた。

それでも、十四は生きながらえていた。

何が起こたと混乱したが、白くかすんだ見まわそうとする。

そして、すぐにわかり……思い出した。

見慣れたはずの自分の家。それが今までにみたこともないくらいに荒らされていた。

家具類は倒れているのは当たり前。壁に穴は空き、床はめくれ、壊れた家電からは火花は散り、天井は空をのぞかせていた。

そして、ほとんど感覚のない両手に持っていたモノ。それは……。

この惨劇を引き起こした男の首級と、両親と兄の命を絶つた真っ赤に血塗られた殺人鬼のナイフだった。

ああ、そういうことなのか。

まるで他人事のように、冷静に、起きたこと、起こしたことを次々と思い出していた。

それを頭が受け入れた時には、瞼を開いていることすら限界になり、疲れが誘う眠気に素直に従つて少しずつ目を閉じていった。

最後に覚えていた記憶は、白いロングスカートの少女の姿であつた。

加添家惨殺事件の三日後に、加添十四は時空管理局本局の集中治療室にて意識を取り戻した。

酸素マスクをし、点滴と輸血の針を刺され、全身を包帯で巻かれていた。

記憶の混乱はなかった。

家族が殺されたこと。家族を殺した男を自分が殺したこと。全てを受け入れていた。

不思議と、悲しみは沸いてこなかった。悲観に暮れ、絶望に満ち、泣き叫ぶようなことはなかった。ただ、事実をありのまま受け入れていた。

今自分がすべきことを己の体の回復と考え、また目を閉じて眠りにつく。

………このとき、十四自身は己の体に起きていた異変に、気付くことはなかった。

無力、届かぬ者の哀

高町なのはは、強い罪悪感に苛まれていた。

私のせいだ、私のせいだ、私のせいで、あの子を助けられなかった……。

自分が遅かったから。自分がやってくるのが遅れたから、加添家を助けることができなかった。加添十四に大怪我をさせ、人を殺めさせてしまった。

自分の持つ魔法の力は、誰かを助ける力。泣いている子の涙を、止めるための力……そうではなかったのか。

何が魔法だ。こんな力を持つていても、救えなければ何にもならない。なのはは、自分がどこにでもいる無力なただの少女であることを知った。

魔法という特別な力を使えても、結局は十年ちよつとしか生きていない女の子。多くを求めるには彼女には酷過ぎた。

それは彼女の関係者はよく知っている。関係者でなくとも、彼女を知ればそう思う。しかし彼女自身は、誰よりも自分に厳しすぎた。誰よりも他者に優しすぎた。

うちしかれる無力感。容赦なく責め立てる、自分が弱かったからあんな結果になったという現実。

事件現場を見て、口を手で押えても胃の中から湧き出てくる物を残らず吐き出し、無力感という剣を突き立てさせるには幼すぎた。しょうがない、の一言で済ませられるほど、あの光景は忘れられるものではない。否、忘れてはならないものだ。

……あれは、己の罪の証なのだから。

高町なのはの心は、折れる寸前にまできていた。高温に熱されたアルミの針金のように、ポツキリ容易く折れ曲がってしまうくらいに。

ただ、いつまでも折れているままでもいられない。いつまでも泣いているわけにもいかない。

涙は流した。思う存分後悔した。だったら、そこから何をすべきか。

高町なのはは、いつだって、どこだって、転んだらすぐ立ち上がったいた。

あまりにも強すぎて、あまりにも不屈すぎて、あまりにも……儂すぎた。

涙を拭き、双眸を見開き、また前に進むしかない。

高町なのはは、そうすることしかできない。

加添家惨殺事件の翌日、早々にシヨックから立ち直った彼女は、生き残った少年 加添十四について調べ上げた。

知らなければならなかった。知りたいと思った。知って、彼に謝らなければならなかった。

願わくば、彼に許してほしかった。

許されなくとも、自分を罵倒し、貶し、軽蔑してくれてもいい。それで気が済んでくれるなら、喜んでそうするつもりだった。

加添十四。集中治療室で見た全身包帯まみれの姿ではない素顔の写真は端正な顔立ちで、硬い表情であった。

歳は十一歳でなのはと同じ学年の小学五年生。同い年に当たる。

生年月日は四月三十日。血液型はA B。

市内の市立小学校に通い、同じ町内の空手道場に通い、サッカー少年団にも所属し、塾にも通っていた。一週間の予定は全て習い事で埋まっていたという。

学校の成績は良く、学年でも上位に食い込み、運動神経に至っては学年で随一を誇っているという。サッカー少年団では五年生ながら六年生に混じってもレギュラーポジションを持ち、エースプレイヤーとして活躍。空手でも茶帯で、初段である黒帯を取得できる年齢になればすぐさま取れるという評価であった。

友人の数は多いが、独りでいることを好んでいたという。

独りでいることを好んだ、と資料にはあるがなのはには彼の目に寂しさを感じさせなかった。

独りでいる寂しさには一際敏感であるのはには、十四には孤独の辛さは伺えなかった。

たとえ独りであっても、その実周りには友人が多かったからこそ、孤独の辛さはない。

……しかし、今まではそうだったかもしれないが、これからは違う。

彼は家族を失った。本物の孤独を知ることになるだろう。

自分が彼を孤独へとおいやってしまった。

ならば、その孤独を埋めるのが自分の役目である。それが償いとなる。

友達でいい。名前を呼び合うような、そういう関係で。

憎悪の対象でいい。心無い言葉を向けられても、それでいい。

高町なのはは、そう誓った。

加添十四の眠る集中治療室に、彼を見守る者たちがいた。

「……意識を一度取り戻してから、全身に魔力を巡らせて回復効率

を上げている？」

「はい。リンカーコアを起点に、血管と神経に魔力を巡らせて、細胞の分裂数を上げて治癒を行っているようですが……おそらく、彼は無意識でやっていると思います」

その人物は、時空管理局本局次元航行艦アースラの艦長リンディ・ハラウンと、十四の担当医務官を務めるシャマルであつた。

シャマルの書き込んだカルテを見たリンディは、やはり十四には魔導師の資質を示すリンカーコアを持っていることを確信した。それも、強力な魔導の才能を秘めていることを。

管理局が幾度も手を焼いたあの殺人鬼を手にかけた。恐らく、危機的状况に置かれたことで防衛本能が眠っていた魔導の才能を起こした、というのがリンディの推測であつた。

目覚めたばかりの魔法は暴走し、殺人鬼を殺すほどにまで及んだ……いや、十四は暴走を止めるつもりはなかったのだらう。家族を殺した相手だ。憎悪に体を委ねて報復したという方が自然に思えた。

「呼吸、心拍共に安定してますし、脳波に異常はありません……。明日にでも一般病棟に移転しても大丈夫なほど……」

「……ちよつと待ってちょうだい、シャマルさん。この怪我で？どう見たって、一週間^{ICU}はここで安静にするべきと思うわよ私は」

本職の目ではないが、リンディの視点から見れば診断書の怪我の内容はそんな短時間で治るほどのものではないと即答できた。管理局の高い技術力を以てしても全治一年半がいいところ。もちろん治療後のリハビリなどを抜きにしてだ。

十四は生死の境を彷徨っていた。内臓は残らずスタスタ、無事で済んでいるのは肺と心臓くらい。骨は肋骨のほとんどが複雑骨折しており、四肢の骨もほとんど同じ。片目が完全に潰れ、血液は圧倒的に足りなく、輸血があと少し遅れていたら手遅れだった。

その状態に置かれても十四は生き延びようと驚異的な治癒力を発揮していた。

もはやそれは治癒というより再生に近い。

「私も驚いているんです。自力の魔力が足りなければ病室の魔力を収束して取り込んでいるくらいですから。このペースが進めば明日また意識は回復するでしょうし、出歩くくらいの体力も出てくるでしょう」

「そこまでの回復スピードだというの……！」

治療系の魔法は存在し、シャルも他に並ぶものはいないほどの使い手ではある。

しかしそこまでの治癒スピードは魔法で再現することはシャルでも不可能である。

無理がありすぎる。そんな都合のいいことがあるはずがない。リスクがないはずがない。専門家としてシャル、高い魔法の技量を持つリンディは同じ結論に至っていた。

「人の細胞分裂の回数は決まっているわ。このままだと彼の寿命を縮めることに……」

「止めようとしたなら、数分と経たず危篤状態に逆戻りです。私の手では、そこから容体を安定させることは不可能です」

魔力の循環を止める手段は存在する。それをしたなら確実に十四は死ぬ。こうして容体が安定していることが奇跡なのだ。

無力感を味わう者が、またここに。

誰もが、何もできないと嘆く。

渴望、籠を壊して

加添家惨殺事件から四日後。また、加添十四は目を覚ました。

ICUではなく、寝ている間に一般病棟の病室へと移されていたことは大して気に留めなかった。酸素マスクも外され、点滴も一つしかない。

掛布団をどかし、いつものように起き上がる。

痛みがない。完全に治っていた。

腕に巻いてあった包帯を解くと、傷跡は綺麗に消えていた。

あの重症が寝るだけで治った。そんなわけがない、と十四は首を横に振った。

状況を知るべく、十四は枕元のナースコールのボタンを押した。

十四はナースコールのボタンで来た医師、シャマルから大体の事情を聴き、そして己の記憶と齟齬がないかを確かめた。

家族が殺されたことは現実であること。今は事件から四日経っていること。ここが時空管理局本局という次元世界の平和を守る司法組織で、地球ではない次元の海にある場所であること。家族を殺した男は殺人鬼で、男もまた魔法使いであったことを知った。

自分が殺人鬼を殺したこと。自分もまた魔法使いの資質があったこと。自分の怪我がこんなにも早く治ったのは、無意識下で魔法を使って体を治していたということを確かめた。

知りたいことを知り、確かめたかったことを確かめられた十四は、

自分が何をするべきかをシャルに聞いた。

「俺にはもう身寄りはありませんし、国からの補助金や親の保険金だけで生活できるとは思いません」

聞く相手を間違えている、とは十四はわかっている。それでも聞かすにはいられなかった。

生活水準を変えずに生活するのは十四はもう無理と判断した。この小学生の身で独り暮らしをするのには資金的な問題が直面せざるを得ない。

さらに言えばここの治療費もある。加添家は貧乏ではないが裕福でもない。ごくごく普通の、中流家庭であった。管理局という得体の知れない所では日本の保険証が使えるとは思えなかった。

淡々と自分の今置かれた状況を述べる十四に、シャルは異常性を感じ取った。

冷静過ぎる。落ち着きすぎる。これが家族を失ったばかりの少年の顔なのか、と疑うほどであった。

シャルの周りにも、彼と同年代の子供で大人びた、できすぎたと言っていていくらいの子をよく知っている。そのうちの一人は、自分を家族として受け入れてくれた敬愛すべき主である。

だが、そんな子でも最愛の家族を失った時には涙を流した。大いに悲しんだ。子供は、所詮子供であった。

しかし、十四にはそれが感じられなかった。動揺も、悲しみも、何も。ただ純粹に、これからの身の振り方を案じていた。

まるで、テレビで殺人事件が起きて赤の他人が死んでも、何も感じないように。死んだのか、と事実を受け止めるだけのよう。

「ショックじゃないの？」

「ショックを受けている暇があるとは思えませんがね。敵討ちは…とつくに終わってますし、これからのことを考えていた方が有意

義です」

平静な態度は崩れていない。十四は本当に、何も感じることはなかった。

まるでロボット。まるで機械。シャルは無機質な冷たさを感じさせた。

否、そうならざるを得なかった、という推論をシャルは立てた。

受け入れがたい現実を受け入れるには鉄の精神こころになるしかなかった。別のことを考えるしかなかった。

シャルにはそれが、何よりも痛々しく、悲しかった。

「では。偉い人に会いましょう」

淡々と、冷たく、氷のように。

当然のように、十四は点滴の針を抜き、絡みついた包帯を取り払った。

取り払った点滴の管と包帯は、彼を縛っていた冷たい鎖のようだった。

十四の身の振り方は着々と決まった。かかった時間は一週間程度。一切の傷跡を残さず完治した十四は、また再び学校に復学した。だが、通う学校は彼の通っていた市内の学校ではなく、海鳴市という彼の聞いたこともない知らない土地にある私立聖祥大付属小学校。そこからの再スタートだった。

住む場所も変わった。同じく海鳴市の高町家に、十四は居候する

ことになった。

そのことについては、高町なのは強い希望があったことも大きな要素にある。

大きく変わった生活。変貌した環境。

魔法使いとして覚醒したと同時に、十四の目から見る世界もまた大きく変わったのだった。

十四には何かが物足りなかった。

充実した新しい生活。暖かい食事。優しい人たち。生きることには何一つ不自由していない。

そこに過不足を感じるところがあるというのか。

どこか違和感があり、どこかが欠落している。

否、欠落などない。寂しさ、孤独感もない。

空白は満たされ、埋められていた。隙間なく完全に。

そう。空白も、欠落もない。

埋められていた。残らず。凹凸なく、穴もなく、平坦な地平線。

それが、何よりも、我慢ならず、疼き、痒く、渴いた。

だから十四は動いた。

窮屈ではなかった。居心地は悪くなかった。ずっとそこに居てもいいとさえ思った。

しかし、十四はそれらを取り払った。それが自分を縛る鎖と見なして。自分を守る鳥籠を壊して。

自分にとっての渴望を、飢えを、渴きを、願いを、欲を……。十四は探すため、忽然と、前触れなく姿を消した。

それが加添家惨殺事件から一ヶ月後。高町なのはの慟哭から始まった物語である。

理由、知りたくて

加添十四が失踪したという報は、瞬く間に広がった。そして捜索隊の編成も、素早い時間で完了していた。

日本の治安維持組織、日本警察と数多の次元世界を束ねる時空管理局、二つの組織による捜索。近い場所にいるのなら警察、次元世界または海外へと発っているというのなら管理局の手による捜索ができる。

たちまち包囲網は完成し、十四の発見も時間の問題とされた。

十四の捜索を急ぐ理由。それは十四の魔法資質において問題があった。

高町なのはに劣るものの、保有魔力量はそれに迫る物を持ち、出力も高い。魔法に関しては高い能力を秘めた才能を持っていた。攻撃、防御、補助全てに万遍なく、魔導師にとって理想像と言ってもいいほどの。それこそ、成長すればなのはのレプリカのような資質の伸ばし方もできた。

しかし、いかんせん十四は魔法に目覚めたばかり。暴走する可能性は高く、もしも暴走してしまった場合街一つが消し飛ぶ危険性があった。

それをさせないためにも、一刻も早い十四の確保が重要視された。

十四失踪から二日後。九州のとある街。日に数度、日本と韓国を

往復するフェリーを使えば数時間で海外へと渡れる場所。そこに十四はいた。

旅行用のキャリーバックを引きずり、大陸へとつながる半島へと向かうフェリーに乗り込もうとしていた。

パスポートは自分用の物を持っていた。加添家が二年前、家族でハワイに行った時に取得した物である。

完全に潰れて再生のできない左目は医療用の眼帯で隠し、年端もいかない少年が一人キャリーバックを引きずって歩く様は、フェリーに乗り込む客の中で大いに目立った。

だからこそ、十四は呆気なく簡単に見つけられていた。

「見つけたよ。探したんだから、トシ」

少女が、十四に声をかける。

その声を無視をしてそのままフェリーに乗り込むための階段を上ろうとするが、列をなす周りの視線がまとわりついた。

鬱陶しく思いながらも十四は後ろの客に前を譲り、列を外れた。

声をかけてきた方に目を向ける。

そこには、金髪のツインテールの少女……十四の見知った私立聖祥大付属小学校の制服を着た、見知った顔。

日本人ではないながらも、将来はとんでもない美女になることがわかりきった美少女に、十四と同じくらいに目を引いた。

「どこに行くの？黙っていくから、みんな心配してたよ」

当たり前だ、黙っていったからこそ意味があった。心配など関係ない。十四は自分のために誰にも黙ったのだ。

しかし、追ってきた少女、フェイト・テストロッサ・ハラオウンはどこかズレていた。

海鳴にいた人たちは人の言うことを信じやすい。なかでもとりわ

け、彼女は優しすぎた。十四にとってみれば、穢れの知らない純粹無垢な少女と見て取れた。

そして誰よりも、十四にとって付き合いが面倒くさかった人物だった。

十四を追って管理局が人員を編成することは十四自身も予想できたことだった。しかし、かち合うのはアースラ武装隊の誰かとは思っていた。

追手としての戦闘能力も、追ってくる者の人間性も、彼女を十四は厄介としか思えなかった。

「あつちに用事がある。用件聞きたいならあつちで聞く」

転移魔法を使えば、フェリーで隣の大陸の半島につくまでに比べればお釣りが出るほど。普通に飛行しても全く問題はない。

居場所がわかった。行先もわかっている。先回りができる。ならばここで引き止める意味も薄くなる。

「で、でも、」

「用事があると言った」

フェイトを置き去り、十四は列の最後尾に並んでフェリーに乗り込む。

しかしフェイトはよくよく考えると、その方が都合がいいと考えた。

フェリーの行先は釜山。行先はわかっている。なら、そこで搜索に関わっているのはたちを集めればいい。

フェイトは十四が釜山行のフェリーに乗っているという情報を、搜索に関わっている全員に伝えた。

追手が来る。それ自体は十四も当然の如く予想ができていた。それも魔導師……管理局の中でも戦闘のプロが集まる武装隊で構成された、暴力的というほどの戦力で構成された搜索隊が、自分を探しにくると。

自分にそうするだけの重要な価値がある。その原因が自分の内にある、魔法の才ということも十四は理解している。そして方向性を違えば、破滅的な結果に繋がることも教えられた。

しかし、十四はそんなことは知ったことではない。追ってくるなら逃げる。十四は決めた。もう変えない。変えたくない。

予想ができていた。なら予測もできていた。そして対策も立てた。失踪してからの二日間、十四は移動手段を公共の交通機関のみを手段として使い、魔法という超常の力には一切頼らなかった。

魔力反応というものは、個人を特定できる。魔力の波長、特性を読み取れば一発で判別がつき、管理局という組織はその手段のスペシャリストの集まりであった。

十四は魔力の一切を殺し、電車で乗り継ぎ、ここまで来た。

海鳴市からこの港町までは真っ直ぐ行けば一日足らずで辿りつくことができる。それでも二日という日数をかけたのは、日本の警察機関による追手を警戒してのことであった。

そして最大の鬼門が、このフェリーであった。

ここで十中八九、管理局の追手に尻尾を掴まれる。渡航記録を閲覧すれば、加添十四が釜山行のフェリーに搭乗したという記録が残る。

管理局には、転移魔法がある。はんそく行先がわかっているのなら、先回りされてしまい、そこでゲームオーバーという結末に終わる。

十四が最初から空路を選ばなかった理由が、それにある。空港であるなら、尚更記録は整頓されて残るからだった。

密航という手は問題外であった。発覚したときのリスクは非常に高く、追手を増やす結果となってしまう。実行は可能ではあった。この自分には重火器では遠く及ばないほどの武力を生身で持っている。それでもいくら魔法と言う手段があるうとも、暴力的対応は論外である。本当の最終手段だった。

苦渋の二択。どちらもどうせ跡がつかなら、十四は海路を取った。海路には、空路にはないメリットがあった。

出港して一時間半。キャリアバックを引き、船内の船尾へと十四は来ていた。

柵で隔てた、船と海。見下ろすと、船が海を割って進んでいるのが海面に流れる海流が見せていた。

結構な高さだ。近くには、もしも落ちた時のためか、縄のついた浮き輪が常備されていた。

ざっと、十四は見まわす。船尾に他の乗客はいない。船員もない。それだけで十分であった。

柵に身を乗り出し、そしてそのまま何のためらいもなく頭から一直線に海へと落下した。

「オーバープロテクション
全周囲防御膜、展開」

魔力で構成された膜、防御魔法プロテクション。ミッドチルダ式の基本的な防御魔法で十四の使ったのはその応用、全身を守る球体の防御。

海中へと入る寸前、十四の展開した赤錆色の防御が海面に叩きつけられる衝撃を殺し、海水にも濡れなかった。

フェリーが去っていくのを見届けるまで一時間。ずっと、十四は海中で大人しく待っていた。

海面から顔を出し、十四はプロテクションを解いた。

そして手を拳銃の形を作り、真上へと人差し指の先を向けた。

「フォトンバレット直射型光子銃弾、シュート射出」

ハンマー 撃鉄で叩くように、狙いすました照準の親指を銃身バレルに見立てた人差し指に倒した。

乾いた音が響き、指先から高速で魔力で構成された弾丸、魔力弾が放たれた。

貫通力と速度に優れた直射型魔法は、誘導性は存在しないものの、速度がかなりのため回避は困難。ましては不意を打たれ、何の躊躇いもなく放たれたそれは、弾丸の飛来先の目標物は回避する術を持たない。

「！」

『Round Shield』

フォトンバレットは発生したミッドチルダ式の魔方陣が描かれた魔力の盾によって威力が逸らされた。

魔力の光は金色。纏うバリアジャケットは黒のレオタード。手にした戦斧は彼女の愛機バルディッシュ。

十四にとって、十分既知の人物であった。

「気付いてないとも思ったが、テストロッサ」

十四が見上げた場所にいたのは、先ほど港で出会った少女、フェイトであった。

格好が違うのは、彼女も魔導師で、ミッドチルダ式の魔導師の戦闘バリアジャケットアジャケットを纏っているからである。

「トシ、すっかり落ちたんじゃ……ないんだよね」

「そういうお前こそ、あつちで待ってるんじゃないのか」

十四にとってみれば適当に取り繕った軽い嘘であつたわけだが、そんなものでもフェイトの心に傷は与えられるほど彼女は純粹である。

しかし、当の彼女にはどこ吹く風。なんの堪えた様子もなかった。

「……やっぱり、黙ってどこかに行くつもりだつたんだね」

フェイトを始めとした、十四の搜索に当たっている全員は、彼がちょっとした小旅行のつもりで姿を消したとは思っていなかった。そのつもりであつたなら、行先を告げ、一人で行くという旨を伝えているはずであるから。

彼女にしてみれば、いきなりのことだった。唐突すぎた。悲しむことより、驚きが勝った。

理由が欲しかった。十四がいきなり姿を去ったその理由。十四の胸の内だけにある、失踪の原因。

彼のせいで、今、泣いている親友がいるのだから。

メイク・フットボール
「蹴球形成」

魔力が収束し、十四の足下に赤錆の魔力のサッカーボール大の砲弾が形成される。

それを蹴り上げ、器用にリフティングを始める。サッカー経験者であつて、足、腿、肩、頭と巧みに操り、ボールと戯れる。

何も言つつもりも、何も聞くつもりもない。そういう意思表示であつた。

「教えて、トシ。どうして黙って行こうとするの。どこか、行きたいところでもあるの?」

協力できることなら、フェイトは手伝うつもりであった。力になりたかった。

家族を失った十四の気持ちは、フェイトは痛いくらいに理解できていたつもりであった。フェイト自身も、母を失った身であるから、孤独に満ちた目。悲しみを帯びた目。かつての自分と同じ目を誰かが見るのはもう、嫌だったから。

ストライク
蹴撃」

しかし、十四の返答はフェイトへと蹴り出されたサッカーボールの砲弾であった。

先ほどのフォトンバレットより高威力ではあるが、速度は劣る。だが、フェイトは微動だにせず、砲撃は当たらず彼女の耳側を通りすぎ、彼方へと消えていく。

「本気、なんだね」

邪魔をするなら、ブツ飛ばす。それが十四の返答。できることなら、フェイトはこのバルディッシュを構えなくなかった。事を荒立てたくなかった。

そうはいかないのなら。フェイトは力を使う。この力を、魔法の力を。

話を聞いてくれるまで、戦う。親友がかつて、自分にくれたように。

彼女もまた、そのために力を振るう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3259ba/>

悪になりたがりの再生者

2012年1月10日22時51分発行